

年間第16主日

福音朗読 マタイ 13・24-43

2023.7.23 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
小田武直神父(教区本部)

今日の福音箇所は、イエス様の有名なたとえ話、毒麦のたとえ話でした。良い種を蒔いたはずなのに、良い麦と一緒に毒麦も育ってしまった、と。どのようにしたらよいのでしょうか、という問いかけから話が展開していきます。

この良い種というのは、神様の方から来るあらゆる良いもの、毒麦の方はこの世のあらゆる悪いものというふうに捉えることもできます。そのように考えると、わたしたちの今生きる現実、良いこともあれば、同じくらい悪いことにも見舞われる、そのような現実を表わしている話というふうにも考えることができると思います。

ところが、神様は、主人は、そこで不思議な答えを言うわけです。「毒麦もそのままにしておきなさい。良い麦も一緒に抜いてしまうかもしれないから」、そのようにおっしゃるわけです。これにはどのような意味があるのでしょうか。

そもそも聖書を見ていくと、わたしたちのこの世界が造られた最初の時には悪いものは何一つ無かった、良いもので満たされていた、というふうにはっきり語られています。旧約聖書の創世記の出来事ですね。神様が良いものとして全てのものを造られて、そこには罪もなければ痛みもない、死ぬこともなかった、というふうに記されています。

ところが、早くも悪が入り込んで来て——それは蛇にたとえられていますけれども、わたしも蛇が大嫌いなんですけれども、それはあくまでたとえですね——早くも悪がやって来て、人間を悪へと誘惑するわけです。で、その時の誘惑する言葉というのはこういうものでした。「この実を食べると、神様のように善悪を知る者となる」(創世3・4参照)。それを聞いて、人は、ああ、その実を食べると賢くなるように思ったと言って食べてしまったというようになります。それが、この世に悪が入り込んだ起源だったわけです。悪というのは、何か悪いことをしてしまったからもたらされたというのではなくて、もっと根本的なことです。「神様のようにになりたい。神様のように何でも自分でできる者になりたい」ということを願ったところから始まってしまったわけです。

ところが、その実を食べると反対のことがもたらされてしまった。神様と離れて、苦しみが入り込んで、罪が入り込んで、死ぬ者となってしまった。そういう現実が行き渡ってしまったわけです。それがずうっと引き継がれて現代まで続いているということになります。

で、そこで大きな疑問が生じて来るわけです。そもそもこの悪っていうのはどこからやって来たのか、っていう大きな疑問です。神様は良いものしかもたらさないはずなのに、どこからやって来たのか。あるいは、神様は全知全能であるはずなのに、なんでそんなものを許したのか、すぐに滅ぼさなかったのか、という大きな疑問が生じるわけです。今日の福音の箇所の話にも通じて来ると思います。なんで毒麦をすぐに抜かないのか。

で、そのことを簡単に、明快にわたしたちが答えることは難しいと思います。神様は良いものしかもたらさないで、悪というのとは神様でないところから生じたというしか言いようがありません。更には、神様は悪が出て来ても「すぐに滅ぼしてしまえ」って言うような気の短い方ではなかった。気長に待って、そしてむしろ良いものが育っていくのを望まれる方だということと言えることだと思います。

でもでも、わたしたちキリスト者はそのような不幸を上回るほどの、そのような悪を帳消しにするほどの恵みが与えられたんだということも知っているわけです。それは、イエス様によってもたらされた救いでありました。

神様はこの世に悪が行き渡って苦しむわたしたちを見て、「助けたい」ってずっと願われておりました。そして、最終段階になって、自分自身が人となって助けに来てくださる、という救いを表わしてくださったわけですね。それは、ただ姿形だけが人となるっていう話ではなくて、わたしたちの罪も苦しみも、死ぬことさえも引き受けられるほど人になられた、ということでした。そしてわたしたちの苦しみの極限まで共に担うことを通して、十字架を通して、救いを表わしてくださったわけです。それがイエス様の救いでした。

それを一言で言うならば、神様の愛っていうことになるかと思います。神様は、たとえこの身が砕かれようとも、悪に打ちのめされようとも厭わないほどの愛を十字架上で示してくださったわけです。そしてそのような愛はたとえ体が滅んでも、この世がどのようなであっても、決して失われることのない救いなのだ、神様の愛は決して奪われない救いなのだってことをはっきりと示してくださったわけです。それがイエス様による救いでした。

そのことによって、わたしたちの救いってのは大きく変えられていったわけです。たとえこの世で苦しみに見舞われても、罪に涙することがあっても、それ

でもなお愛してくださる神様の愛に寄り縋って救われていく道が示されたわけ
です。

あるいは、わたしたちとは程遠い神様を目指して善行を積むのではなくて、神
様のほうから来てくださって、苦しみも共にしてくださる、その神様により頼む
ことで救われていくという道が開かれたわけです。

そのように考えると、この世の悪の存在、わたしたちのいろんな苦しみの存在
というの、イエス様の救いが引き出される一つのきっかけになった、契機とな
ったというふうにも捉えることもできると思います。この世界で苦しむわたし
たちがいたからこそ、神様はいてもたってもいられなくなってこの世界にやっ
て来てくださって、十字架の死と復活という救いを表わしてくださったわけ
です。そのようにして、わたしたち、この地上では苦しみもあり罪に涙すること
もありますけれども、むしろそのことによって、それでもなお愛してくださる神様
の愛を深く深く受け止めて救われていく道が開かれたというわけです。

とはいえ、やはり、わたしたち、苦しみに直面したとき、その悪の現実
に直面したときに、すぐにでもそれを取り除いてほしいというふうに願いたくなる
こともあるのではないかと思います。それも無理もないことだと思います。

でもでも、わたしたちのこの世の人生をつきつめて考えていくと、誰一人とし
てこの世でその悪の現実から切り離されて、解放されていくって人はいな
いわけですね。それは、たとえばわたしたちが悪いことをしない、しなくなるこ
とはない、というそれだけではなくて、たとえば神様のように完全になれない現
実、この世ではやはり苦しみには見舞われるし、最終的には衰えて滅び去って
いくのがわたしたちのこの世の現実なわけです。わたしたちのこの世の現実だけ
見たら、なんともみじめで虚しいものだというのがあるのまの姿だと思います。

そして、神様はそのような現実をたちどころに取り除いて救うということ
はなさない代わりに、そのようなこの世の状況がどのようなであろうとも決して
奪い去られない、無くならない救いを示してくださった、というふうに見るこ
とができるわけです。

その救いは、神様の愛なのだというふうに言えると思います。たとえこの世が
どのようなであろうとも、わたしたちが罪に涙して悔やんでいるときにもなお愛
してくださる神様の愛を深く深く受け止めることができるという、そういう救
いです。苦しみに直面したときに、共に同じ苦しみを味わって救いを表わして
くださるイエス様と深く深く出会うことができます。更には、わたしたちいずれは
全てが奪われてこの世を去るときにも、そして体が滅びても無くならない救い
があるのだ、それが神様の愛なのだ、と知ることが出来たわけです。

それは、この世の状況がどのようなであろうとも、むしろ苦しみを通して更なる恵みを受け止めることができる救いです。今も戦争があり、疫病があり、苦しみがなくなるこの世界の現実があります。でも、わたしたちにはこれらを大きく超えた救いが既に与えられています。その救いを、今の苦しむ世界に向けて発信していくことができますように願い求めています。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>